八犬伝第九輯下帙下中編

新編金瓶梅第八六集

清話外態　忍老評

帝國圖書館藏
600
87

特
曽イ門
650
89

里見八犬傳第九輯下套下上編

拙評　訥言齋默老述

○此編巻首に諸将の年齢と繡像の趣の違ふと細ら
ん説述られし最めでたし世の看官とてもいとも
ゆゑ繡像小ちゝ目ぬきまゝ實録年暦のうさんくさ
ひがらひせらるゝ斯細ふとりうる大小実録と看るゝ
ほも益ありて翁の用心つゞまやうるゝ感ぜらるゝ叔父小子
朝の壻源八の音訓同名なれと疑ひしふ
細小さとて差あるこあるに丈夫の計とて棘髭鼠魚の
壻と骨と改られし今ぢう汗顔の如ぐ才の拙さ

清雅堂藏

小文吾が右濵の尼と比良せれしに桂評と同意なれども巧拙とゝ〳〵

と恥ぢるのゝ

○百三十六回管領、政元の親兵衛と豪留〻一件驕臣の權勢を奏するさまも有べく又然りとて史に筋るゝるゝもいとゞ士の才藝を試るに託て上意と称して押とゞる奸智のさま馬加ゞ大田と云理に押曲るゝと執と替れる大かた〻扨此処ゆく紀二六が返り来る都合とよくも合されるゝある初り紀二六が家に居くに親兵衛ゞ陰り居て紀二六と此るゝと抜さんゝる容易るゝぬと前編にて書簡と扨せく安房へ返〻又云の次第にて再び都へ返り来ゆる場合迄もゝ〻紀二六に児嶋高徳の大役と課せんとゝ紀二六が往かも返るゝも一役ゞ扨せる趣向実に所人の代に斬とに意と云〻〻と云及ぶ〻紀二六密使の用とゝひつゝる所にて笈頭鈴、溢に入ゝゞ所曩に調貢の法色運送の折香西復六が借る木牌ゝに用にゝられるゝも拙びな〻照文親兵衛の別に所鏡と解く私いと平らに安房へ返り都にとゞ居る親兵衛に加て地〻の風波に逆に集散離合の文章実に感深ゝ

○百三十七回紀二六管領の鈴に餅賣とゝりて入込所門章ゝる小賄賂〻て取入るゝ見るゝゞ〻家に〻妙處ゝる前編に於羅の命ゝるゝ下戸酒屋に仕ゝ親兵衛ゝと誑

ゝに小路人とある唐山の樹史ゝ

穂當

好評
凡巧者
主客評
しかく
至當

る今亦紀二六が餅賣となりて門卒と誹る笑い敵
のあり謗られ今い敵と謗る一笑い主となり一笑い客となり
文の倚伏変化自在なる式且紀二六太平記と讀び件
書中の歌の数を述るい記臆の所い云ふも及ぶまで
讀書の益ふもなりてやでこれを高徳の天莫空局踐
の句伏誦しるい先の執筆傍小聽する件の伏線なるべそ
前伯治高貞の妻のまねるど取まじくべく法なる故小治も
心の付ね所後に高徳の話小ゆてゞふさるも存りりと
見ず根小書ゐるさまて小紙ゆ届まてるなり徳用い香西
復六が子にく変小帰て居とんとんひゐるなりて親家

穏當

が抑留るまてゝも文答が業にてあるる最奇へ徳用が素はと
前編小可説所とゝ延て書まて昌も妙なり初漫六が
子と以ふまねど知まてい伝のるもなり追てに書の伝の分る所
給孔の系の漸てに解る如く最妙とゝ此徳用いかふ
放逸の伝るんいなりりて出家もべくも抱ざるに摂家へ
孔て令更り法弁小文が勅く偶中にて一疋寺
の住僧小なりる孤と狂獨りと性しむなくく大の法
會と拒しまり大多新と東に尚分と者りみぐ又管領と
さへそのゝ親家小仇なせ今の世の人も適偶中の幸に
逢自ら旦りとて性と云ふ已がまに振舞ものの災

著作堂藏

猜評ハ當ラズ

就ハ遂ニ人モ博ク多ク是等ガ勅懲ノタトルベキハ宜シトスル

○百三十八回堅削ガ虚言ヲ以テ徳用ノ非ヲ飾リシ所尤左

モ有ベシ復六ガ徳用堅削ヲ志ヒ言ヲ聞ク洛中洛外二三ノ名ル

聖ル大刹ノ住持ハ世ヲ捨ヒ恭ハ小人ノ情態ヲ熟利ノ心ヲ

写シ尽クシ多ノ有リシ故ニ叔父復六ハ両個ノ側室アリ

又徳用ガ弟ヲ有リトイフハ伝ノ角ハ先ノ伏線ニシテ口絵ハ再ビ

ヒトツ年ヲ経ハ再六ガ幼年ノ時ハ又ハ再六ノ子ニシテ親ニ傍ガ

改元ハ押留ラレシハ徳用ガ茲ハ在リシ故ニ世ノ

看官ノ思ハ為ニ所ナリト復六ガ徳用堅削ノ口ノリ其

證合明ラカニ結城里見ト伐ントヒシト改元ガ世ノ騒ギト

好評

思案シテ征伐ヲ定メ所サモガ管領ハ支度ノ見識ヲ奇

ニシテ大ハ徳用堅削ガ親族ノ宿所ハ忍ヒ入リ刺客ヲ

ナスベキヲ戊辛等ノ人ノ忍ヒ入ル跡ヲ見テ戊辛ヲ固

ク志ル所遠ノ所ハ西中モ彼ル事ハ有ベカラズ偽リ物

語ヲ思ハレシ又言ハ一ツ面ハ改元戊辛ヲ呼テ

親族ノ帰路ヲ拒ハ如ク親族ノ便宜ヲ徳用ガ

奸謀ヲ防ギ不用意ノ所ヘ餅賣ノ白地ハ来リシ親族

情ヘ消息ヲ通ジ此便宜モ復六ガ授セシ木牌ヲ便ト

ナル奸人ハ謀ヲ企ル都ク害ヲ為シ善人ハ不

用意ナシテ便宜ヲ為ル勅懲ノ意自然ト言ハレシテ

反對評しるく佳妙

穩當

紙でとる犬よう餅賣が児嶋高德の橋本に書とゞめて
るを誅ぜる所より親兵衛が餅の餡とあつらへる其餅の
便宜とはく後太平記と讀るの將未と誠しめる一も拔
目の餅の價と包まる紙に酒書して紀二六に示さるゝ一
も咎ぶるく且前編中の餅酒の下戸酒屋に味方
とあざむかれに此度い亦味方が餅酒の計策わく敵と謀る
反對最奇之其腹全と封して置く當之郎妙に上書のる
一つく小評せんゆい甚奇かぞへ畫ぶ
○百三十九回五條の橋わく紀二六代四郎が出逢ひ一所を
尤めでう今茲に此件るれば代四郎が親兵衛の出落ま

桂評と同じ

現八会評しるく妙と凡巧者る小

での所に小せんも仕方ゆ〜進退諾らぬ場ゆと紀二六が詰わく
始終を知りく且紀二六小用ある時ゆ〜べき便宜の場所と知る
是が後小親兵衛が治の時千事と知るく便宜の張手小るる
扨少一の所わも拔びるゆ〜親兵衛試驗の場い先水滸傳の
北京梁中書が係わて青面獸と急先鋒との比較の例な
ぶ〜少一も其放輸とふ〜び又前この編小犬飼現八が赤岩
假一角の門前と太刀合せとるすと極とうくられる最妙るり
五虎の人の外小德用と加へられる些るも奇るりとゆ〜
夫に伯父とら小五虎の者と一つく小試驗して後德用と
立合てい有べるとにて真笹に知るとうゞ最初小鞍馬

見巧去

海伯与の比較其次い西詠氣との立合いふまると尽る所経緯
い飛病して其場とまづさせる一倚一伏看官の意外小出る
いとく奇なりといわべし次香車及足いとぐと出る新亦
不用意小加皆とつつせき文より紀内鬼手五と引出る又
鬼手小い礫の俳さ〳〵張りる又ッ新趣向是迄著作
翁の作の八所稀い句論復市も亦礫の俳とはる
人い善人〳〵水滸伝おも没羽箭も穆英も皆善人なて
悪人なて礫の俳とるせ人なる孤ふ此鬼手五小礫の
俳とさせるる新奇〳〵其孤り却く已が加皆せ香車及の
害とる後小五虎相害るるの張本とるるるど用意と奇

好評

中の奇なる趣向妙〳〵一体此改元換覧の次第手場の拵る
一々手執と書遣される妙文一こ小巻る小遑あるぞ惟おる新奇
と思ふ所のこと評まるなり
○百四十回香車及親兵情試撃の場槍の尖頭なて白點と
付る所お青面獣の拵るる故轍小ふるぶ誠小換骨奪胎
少て申分なし鬼平五が味方敵も其名ぐ豊えうん親兵も
かくく用意の礫の業い看官の手の分る所奇なるく扱馬上
花道真の場小ものく種子嶋中太と廣當と異論と生ぜ一所
亦文の倚伏なり此所なて正告と廣當とも唯一並なる出く試撃
上ない石子積の文章なて面々なる五虎と梁内も君子の

この条特に知音の評多くはべるべし

廣當あるべく他の四人と同じくべし且つは鴻一の高く孔
ゆく親房が射術の妙なるべし鳥銃の妙なも顯しる
所文章に限せず翔多と射るるも甲乙の次第とはなれる
一つも拙びる此所なも畳廣當が絶の詞なも君子小人の習俗
と知せるべし尤めでたし是より德用騎馬槍棒の試ゆ親
房の人物ふかく視るべし八十二斤の鐵棒とはんも殺伐
小なるべきなれども政元が此試ゆあるよりくまく
より設置る政元が心中は親房が力量の力量
あるを試んと又いつくたれの器量あらば德用が棒下小
ひざくと殺さんとあるくく彼是なて此鐵棒とあるる

好評

鉄棒は仁字小相応しるべし六の丸のうちあてあるべし

ちなみに只今の夏力といへる青砥力とおなじくるべし

るべ此はの用のるるべし後小五関と破る器械とるも最妙
なり作らんと美少年の親房とは関雲長の役なをいはんく
安小五虎と為い後小五関と破る徳用なる絶深るべ欲是のるるあるべ
巡嶋記小義秀が修羅五郎の鉄棒試ゆんとせしと同様
なて著作翁の用心なるべし親房とは徳用なも倍
あるせく後印篭なる神授の仙丹と出て相なの者共小與元
る仁字心小通じて尤宜し政元親房がなるの所
於陽の情と起しる親房とは誼性の所なと演義三國志の
関雲長の趣と摸まる小此なる又模せるなも此で其中へ
紀二六代四郎が試ゆ勝利のるとなく於びる政元は親房

よく眼をつけられうり是活眼の言とぶべし

好評

が行狀と德用が詠歌の齟齬せと疑ひ〳〵西三個の間蝶と結城へ出に此使返り来るの時に之の沢わん襯深るべし此編の結句小形貌ふ〳〵人を取出び聖金を雖失ありといるい勸懲の言ありて看官の良藥なるべし

○百四十一回是より又編とり〳〵竹林巽のると說出に文法の抑揚最妙〳〵なれども竹林小巽風と加へ〳〵早くも虎の出ざる兆とあり〳〵且其妻の名い於兎子中て梵語の穀於兎の意と暗小含ませる抑〳〵も抑びるべし是皆彼樸る物中て竹林巽の風小ありて於兎の名と打出し〳〵此人不義の亡命より毋彼の國小あるべき逐小又宮童子と打出と夫より虎と画ぐ

評なるべく妙

好評至當

この眼病ハ作者の隱微くまなくの筋も出つるなり

にかりて九里平小ゆきり巽ハ信と思ひぜて友の妻と盜ミ於兎子ハ良人と棄〳〵奸夫と奏る幸に九里平の遺跡と嗣くも恩と思ハび是此夫妻ハ人身中て虎狼の心あり是ハ心中に虎と画さ成せ小肖ず巽眼病小ありて懺悔て罪悪ハ〳〵落らざこれども其天罰と道〳〵所なく妻の嫉妬と樵六が邪念と拒らまく信と融ける紙ぶう〳〵自注中も詳なり此寅童子と楔と七金岡の虎の画幅と引出し〳〵如之小自賭と黙ぜるとき〳〵打出〳〵叔此画虎も一通りの神画のミわも非ず呉國より貢にせ〳〵虎ハの〳〵物白出び其験なるとぜ〳〵び巽が寅童子の奇瑞なんと神佛の靈験と語ハ小及んぐ樵六が說破なる字嘉四郎の

のるら不用の辨論小似るなども是文章の倚伏ゆて啓ハ詩の轉
句のごとく特小弥勘太とらひ守嘉四郎とハ皆狐の縁語ゆる
句々皆拔びるー此樵六が證と取く読破るせハ逐小勇猛
精進の信心と業るいう故小此一奇語も尤是所要のとく
○百四十二回此段章首夫妻想憐の癡情の文章句々皆
妙ゆて唐山小説の文とらども此上ハあらじと思ふ〳〵巽が内と恐さ
て亦業況懈ゆと殺兎のゆ男色と汚ゆるゆ貧往事小懈ると同
一基ゆて因る世小沒落のゆ氷人ゆ中夫とゆう婦とゆの
徒小ゆて此の孤寡ゆ〳〵行童が巽小さとゆて何ハ皆是貧官
〳〵さとゆ妙論ゆて如何ゆ悪人も一善既ゆ機ざせゞ衆悪退き一

の邪念起ゆゞ衆魔障とゆく進ゆると示ゆて勸懲の心と賢ゆ者
禁錮の路と啓く伏線のいとぐちと視せゆて於兎子が樵六と
相ゆて行童と淫せゆ〳〵却く我身ゆ中樵六も怒と助ゆて
彩童と淫ゆ〳〵皆已が罪已と責るゆて小人の諸計ゆるゆ〳〵
巽ゆ妻と殺ゆ〳〵怨小堪えゞ即せ小樵六と討殺せーも已ゆて
已小返ゆ悪るの應報ゆう巽が浪速小到りて巽凡と改名ゆて
ゆ及びく行衛のゆ〳〵小巽凡とゆ〳〵早虎の出ゞ前兆を
況ゆて亦ゆ前ゆも評せゆ〳〵巽凡ゆ亦是人身ゆて
虎狼の心と具ゆう去るゆ〳〵画虎の彫ゆゆるれゞ姿ゆて
人ゆれゆゞ化せざるゆ虎ゆ又金同の画虎ハ眼睛ゆきゆ〳〵も

この翁の外に進むあく意の至り

妙画とゝ雖ども猶ほ精るたの虎り巽風が虎と画たく は意る所也その虎精い技上小あり今浪速小来アリ小及びく虎と画ぐくると忘れて神佛の冥四討いさらん技上の虎精い再び已ゞ身小返アリ一個の化せぎる虎の心を備アり又禄斉屋余市とゝりの是も一個の小人論ぜる後のるいるけれども先此所と比喩せん小巽風一ッの大銃のごく政元い筒中の火薬のごく大銃小火薬ありとゝ雖ども火線の等ぶれば發せざるがゆく余市とゝ火線在ッて而して後政元の火薬と巽風の大銃(等ッて)ゆ完ま宮ッで小到アてその也小虎の目小點ぜる場小かさる所へ徳用堅剛なる吹雪姫の加持小よりて再び親ッを祷ッて

則是本回の大関目

妙評

祈って政元の怒と起ッて親ッを祷ッ小せんとゝひる親ッを祷ッ画精至當の論なると此場ッを画れり小是亦文章の倚伏ッて前後の緩急と合せ且句こも亦先ッく丈この要とるこる実小奇妙の筆なる親ッを祷ッ画論の件種々の画談と引ッとる博識宏辯看官の益も寡ッからず

○百四十三回政元が故画鑒定の件彼前小評せゆく巽風の大銃小政元の火薬と引ッく虎眼小點ぜる所巽風が打扮今ッるゆく写ッるく物なり後宮小も比喩せんに画幅の虎い其神在ッく精なる巽風が心中の虎ッを精あッく神ゆ「怒ッ」「陽燧」の鉄と石のごッく虎眼小點

画虎人虎の出没評ほく妙

虎神合体して即ち小銃玉と化せざるべし今も火薬猛烈の
発せざる及びく甚傷の人なれ物損れ破裂せざるもなきに
甚災難小大害とするに如かれり安小さい虎出れば小さの異風い
頭と失るひて一虎倒れ一虎生ずる所も妙といふべし於兎子
の寃魂と市巫の弦ひて知るせ異風の梟首の沢と行客の街
談ひて知るせる一ツく板目の政元が怒と移して余市と刑せ
権家の人の情態斬ある一ツに若るべき如何ひも苛政といふべし
虎の出ずる及びく諸人狼狽のてきてきく且又糞汁穢物の
不用とるり一有拙るど目前ひ今ちるべく能字出されり

皆虎の評ほく妙

げひも此古画鑒定の件い珍器異物小志と失ひく玩物の
ゐ小害と変ずい画虎のゐ小喰ひ小月ごく好るの去の教喩
ともいふべし

○百四十四回五虎の者共小妖虎の征伐と命ぜらるる所廣當
ミ人い公事の勤役ひて甚役と道と鬼平丘と代りふるせ
最ふる一切く此異風が始終の件い虎のるとく文章と作ら
ひてうとんぬうう詮ぜる処政元忍い足利家の虎狼ひて又甚
宰小香西復六とふ豹豺と生ず親ミ系名の善人と虐げんと
ふ心より五虎の奸人と出ものの之小異風が信義廉恥るれの
虎狼のれ者と彼し赤り又商賈中貪慾虎狼の余市と

穂當至評

ここにも五虎のやれい虎狼域中の者るとぶ虎狼とふく妖虎
と称しむ伐ぶ〻さ水泡ぶ〻でして切く爭闘と招けり茲に妖虎
と行儔のるもり又虎狼の悪僧德用堅剛とこ出ふ親系
賜ねの支帆と姓ふ所い関雲長ぶ赤兎馬と姓一伊るぶ〻
青海波小走帆の妙對とらひ帰國といそぐ心小支帆の名號
よく造りて妙こ称り親系政元小虎のるとぶ二の養ぶ極
せり初小宋均劉昵ぶ故事と牽く仁政とそあ政元ぶ迂遠
るもとて聽入とぬ小ぶるもく又退治せんとふ霊ありて人傷
ぶ必形體あん既小形體ある者るぶ姓さんる雑さふあらぶ
若又目小んるぶ形體るぶ墓目鳴弦中て結ぶんとふ

猜猜至當

論潔くふ當の論中て最愉快とふべ一虎對治の賞小帰國
とそむ所関雲長ぶ顔良文醜と討るる伊るぶ〻切く演義三
國志の趣り一層上るる伊意ぶとまい感心のぶ〻政元帰東の
願と許ぶ中るりく四箇所の新関の関符と請ぶる所一も抜
目るー〻ぶ去此文書も後小ふ〻ふ論を生せん紀と思るく親系
出立の所中て紀元小多ぶ夫ぶ代ぶ所小通達せるるぶ一も抜目
るー家小又一ぶ妙作い德用ぶ妖虎調伏の祈禱の中ぶ合せ
ぶの功もるれ〻親系ぶ妖虎退治の命と蒙るるるぶ〻
若親系ぶ功と建るぶ故元ぶ輝中せんとふ疑心さ〻川紀一
遂小吹雪姫と盗んとする悪意さ〻生ぶ〻德用堅剛中をのぶ

虎字は至極の好評

尤好評

れ〳〵四人の武士の恵と起りる又手上と生く香車及び已るが同
輩と為作くくみと生ぜ〳〵皆獅子心中の蟲なるり香車及計
策と行ふ所出て比叡山風こばく次第して駿兵と散せ〳〵荒
も亦虎小縁わりて且藻洲千重及るの小頭が四人の頭人と
誣〳〵謀叛人と称んと得る冊者も亦虎狼中の虎狼心る者
に〳〵孰此四五回い皆虎の字と主りて作意せられ物なり心
るもかぞう虎の猛威暴熱とつく説めけば夫が猶る親
家の威勢と増る文法欲とねぞる〳〵香車及餘の四人
と詭て〳〵相屠戮る件姜維三賢と害る彼るが夫も
陽てもさ〳〵後る所い毒と〳〵毒と征る敵も味方も千
重及るが逆謀の狭炮のつぶ折小ちも亦折例させる看官
意外小出〳〵絶奇〳〵但〳〵完早安かて千重及るが逆謀と雖も
知人ちるこたを徂ふと尋わ出る弟ふと直道が勢ちの内小
浅傷の去あとせ〳〵夫ち高顕出る所る陥る者の泥中て
作意最妙るり実小餘の作者の及ば所感心こと
○百四十五回此完仍前小評するごく敵も味方も悉く千
重及るが逆謀と〳〵逆謀の洩ちるいるるこ〳〵所まで死
身で有ける直道が加勢と正告るが弟の内小助命せ〳〵去一あ〳〵
ありて逆謀ぞられ千重及るも亦悉く刑せらる最愉快と
いふべし叔徳用が為者姫と盜む件姜て祈禱の般若榎小入る

姑く上回
發兇の
日と為るべ
自解に
至るべし

る人京洛の太緒の七ひとつく樋と勝げく屏と越せに堅剛
な狭の鹿杖と溝の橋に流し一亦毛と樋と荷に杣代る小
道具の些ひ方一も拾びるく毛弓に評する迄のるもれれども
都て妙に徳用白川の山路に登り一所の小堂に休息する
青面堂の取合せ破庇と漏る月のほのかさもさきのく寝うて
割竜と宵くるど千場れ急にて画ぐ〻ど一吹雷雨と樋より
かれ迅速雄義の場るると忽虎と出て二兇と奪殺せ
る最快一但一此處にて二兇に虎の為に殺されて此場の
様子と知る人さきと雷雨と擒に一来るべ迷に此時まと
見せく後の趣向に用るるどりも食ぶべるて奇妙なり又

好評

至當
好評

代四郎が紀二六と五人の賊兵と連く白川山に尋登るるど定めく
後に用る所あるべ一〇一体此編に後の為に皆設る執向にて
先仕入るまども此内に〇〇餘人の及ぶ妙所あるに敗元の親云
ふと聞に聞せんとひ〻に後に不用云に為て為と云出せ一詞るまども
徳用が心に深く伺ふ〻ひ居く再び親に聞て妖虎對治の
命と受るに及びく遂に吹雷雨と奪ふ心と起させ〻ら伝く
姫の危難に敗元が自ら醸一成せ一に同じ千雨と擒に連
れ去るべそ又徳用に虎の為死るが知るくやきも妙り又
親に聞に敗元が聞に聞せんとひ一うてあの詞に為てらく
帰心とうるべるると一句と二途に身ひる奇絶句論く著作翁

著作堂藏

評ひく精妙

隱微發明この翁

自注も有りく和國小説と虎と三ぶと也一且任意の異ハ有て
殊小説の意向ハ極文奇妙ことらぶ〻千故ハ漢土にて貴ふ
せ一虎の檻を拔出せ一ハ尤すぐるまて異論なし傾城水滸傳又僧
の虎小変せ一るハ実録小説ふ唐山の書ハ見るる多々れば
品小説ぶ日本も亦有るる無しとも云ぐ〻ん欲新編金瓶梅此
書のごとく則絶ふ初小評せ一ハく虎狼にて暴なる苛政
もって虎狼のごと権家の人と也一奸淫貪慾虎狼のごと
强夫妻の奸徒ごとき一加之に演畫士の霊験金圓の妙画小
虎の亡魂さへ加ふるとと見えたり故ふ拔出せ一
例ハ多一とらどもぐう残暴とるせ一とえば一編虎のるといく

の意

相照應一執向と立てれうと見るる画精のると論ぜふ和りて千前あつても
背るく左あれども右るに拘ふて虛実の境と論弁せられ一所旨と自由
の論へ理とふくらぶ〻斬るるをるぐく又鬼神の霊妙といくらぶ此る
ゆとらぶ〻虛中の実と実中の虛と互ふ知ちて執向と立
らと也が親之表帰國の便宜とりう立帆の馬ち八十餘年の
秋杖皆有用の物とるつく関と破る所皆皆脈の為ふ〻ぶつく
る欲今を後の出ると候ふ〻るを迫て團圓近ふ〻るつく
執向ハ盖妙ふ妙ふる批評ふも述ふ辨るふる唯其ハ三と挙て
云も翁の自答と情ん為ふて且ハ篠崎二賢契の妙評とたく〻
ん〻ふ〻ふのふ〻ふ〻

餅酒の評又妙餘今ハ唐山の稗史を引用

天保己亥初春　　默老批評

○初中紀一編せるてあり海辺なる下戸酒屋主て親
類が図船の者と流しい餅と酒を又紀二六ゞ戊辛等と
流しい餅ゆうとゆ一に後小親ニ示ら後せ一酒の價と
包ミ一紙い酒書ゆして餅と酒とを用照過せる奇妙て
妙ゆて餘人の作るゆうい餅とを心付とも金包
の酒書とを心付ゆゞ返ゞ返ゞも奇と妙に

拙答評餘言

默翁学識廣博其才流風且和漢の稗史を見ゆ取
るとゆゞちゆゆの芳評の如い一時の漫戯るゞけとも條
々皆至當至妙るゆ和ゆ毛鶴山と伯仲をとゆゞ就中
篇中るる諸々人を皆虎豹ゆゆゞ作者の光を
増ゆて隠微と發明せゆる知音の用心感るゆ
あまりゆとゞ中ゆ猜評い當るあり又當ゆるもあり當
らぬ未編とんゆゞ言ゞ政元ゆ親兵衛ゆ
與へる八十二斤の鉄棒の如い後ゆ関を破る時の用ゆ立る
あゆゞゆ徳用ゆ六十斤の鐵杖ゆ勢力と政元ゆん

せんとてこの如く器械を使ふい親兵衛が本意なりしが志編の
出るに及びてはじめて明るべし徳用多くるも亦是に準して知るべし
又作者の用心あり初竹林翼が酒毒ありて既に蒼と生ず遂
に瞽者になりしより舊悪を懺悔して勇猛精進の信者
となりて欲せずして兎子樵六とふ大魔に障碍られしが一旦
その眼疾の愈る故に翼の一生涯盲目にて後の殃
孽なるべし則是無瞳の画虎の愁に眼に点せられて忽に世人
と恐赫せるに同じ猛獣とても瞳子なければ
人と害せず万人の翼がわざも明を失へば生涯なりくに安ずるに
愁に又目の見えぬ故に世と隔てて身を殺せに至りかれば翼が
眼病に偶然にあらず是則作者の隠微なる用心この類毎編
にあり中も默翁もまた心づかなりし依芳評にも及ぶべしと飽
ねどもとこれを備らんと求るにはこの芳評の精細
なると感ずるのあるにあらずもとこの処の拙答
に雌黄をその條の上層にあらんこれいらずに再せずとも
感心の外なし世に瞳子なに看官に見せまくりしの
みぞありける

天保十己亥の年春二月十七日雪天に水滸を
拭ひまるる

著作堂老人

又云芳評の漏れると猜評のごとき虎妖の結局
とうてぐちられぬべるべし この二条を除くの外は皆金
玉の評へ今ほう苔のるゆ〜極重ろこ

新編金瓶梅　六集

拙評

巻首の自序に由て及ぶるべうし善悪決判断ゆるゆ公
私の理ゆく自ら晦うるこトとりやトとの屋さとさ五てうる勧懲の
ゆる所最うろ〜
牧編冠首小武二郎が横淫ホ殺人と殺害して壁面の血書鴛鴦
楼の後ゆ是うで小説ふぶるく有格ゆるも岩坂苔六が武二郎
小船りうくさ記の姓名と書已ゴ分代りふるり〜所作人の作意ホ
三所ゆて新奇へ帆九郎名とのゴ毛く大物のてぜいと引具〜
追うる場さも有べ記るゆて武二の血戦いでもまるさ所鉄

炮ゆて元寇の雑兵の傷大風雨ゆて敵も味方も一同り海底に沈ませし奇なる執念ゆて毛室白亀の執もあり亦殘づこひの実法とて生く龍の都へ到る此大風雨なくて武士も就宮へ入り難く伊の角は上げゆと姫将来の吉凶福福の因縁とさとるど云ふるるが有さふるるへ出でり悪人いことぐくわるぶる善人のつまるゝ者に吉祥り居る所へ三ヶ所の上使と北畠家の使者と来りどんく悪人い咎とうけ善人い褒賞とるとふ場面くとんくとなりて奇妙なる龍宮の奇話なれぬへかれん主人の留守に初かこりびゆへ允可と女なる千姫の妾さいゆえんがきぞとん出さんとてきたれ

さゆふりてるて合せ物るどして公とゆるさはる心根ゆえんい脱れ妾の心小さうぢとそむくまく夫の執ひさゆも形ゆんとゆるくへ

○ひど松が順礼の子供とまくこげる所へと外よりたきゆりくるが如れ小ふひの外は形礼いあゆど後と立る際妻の者ゆて前後の都合とあつせられ一合妙こへはひど松とふ者ゆひの外る立敵ゆて後に老ひ所ひふも有笑次の上へ四く奸人と尺へうり

○姫千帝ゆ神ゆとりるひゆりく天狗の奇法とて所へ入る後とび義ホゆりゆ来くゆの波の変と族くる故ふり地獄の怪談実るのどく人へくるく感ぜるさゆはゆぬゝ

ゆ神ゆい己が夫とゆて姫千帝小女ゆ一ゆえんいそ自人とゆて

帆九郎が女房なる奸悪の人に又奸悪の者がとなりて道理と
示され〳〵尤も〳〵此野梅の件は究初阿波と出るい猿の怪談
かりこうけ又大坂へうりこい天狗の所為とは前後怪談は
るとりて結ばれ〳〵是又新奇〳〵
○実が一ツ評にいへる有い素人を作の小説も有まるべく此書
の執向るやおまえい妖虎の怪あり瓶子らい吉の亡魂の怪あり野梅
は右ふ猿天狗の怪談あり此三妖婦は西門屋の姐妃も同じ家と
破るべき者へ扱又孝子よい奸悪の上が媚奉るべき婦人の災とうけ景辱
めとうけく折てさるく和い楠が娘が所れ後は琴柱の為が絶せる俗が
川どちい川ぐちとるとふ諺のやく婦人の為が死せるとは者又婦人の

為がをづうめと更る道理とさとはるる前後の要心最感心なり

金瓶梅六集 下帙

拙評

孝子が己が居くくの穴ぐ〳〵帆九郎と志のぶる是も小説ねがぐく
有格るれども悪人とる処へ忍ばせ〳〵彩るく〳〵帆九郎い偽
筆の名人なて孝子が小つるく所一役附る功去の執向〳〵又偽筆
毒茶の計策は孝子又ん人等が智恵の及ばぬが為ぬ〳〵
あれせ〳〵奸智の又一層上なるとなせ〳〵妙〳〵かりん大いりとる其
ふつき〳〵凡この妄敵い毒なてあれ結果とつけられ〳〵主人のる
ぬがくふまんが残忍いよ〳〵ゆくひで〳〵此処の実検使るい本ぞ手の

立役とせひも妙に見近の件く検使の役に大方敵役なる所て
ゆて立役にせられる前後の役割感心に咎なく越前へ引に及ぶ
帆九郎ともあるに毒殺のると命ぜらるに奸智の去の互に私慾
ときとくみく義理と不思所一つく妙に福六が切りに逆く却く
子の妻と語せ一匹材木の放行まで一も咎こなく過て大小
家に一つの妙に咎なくに以上もるに奸智邪曲の人なれども又英少年
のひ松あり英姫人のよりやの内結ありて咎なくとけるの内落
せ最奇に又その上へきとり木之外とふ去有くかる奸智なる咎
なくの大金とあるに大金と云る智術のなれ所むとるくを上咎
なくが福六とさとり気うと云海に三好家に福六が献上の材木代に

く福六が損せ一金も部合一万金ゆて咎なくとり元られるも
一万金福福忽ち所と更くる執向照應して奇妙に且に咎なく
が完物かに吉とすせ時仇に男色とりてこぶく後に女色も
てたどりる伝交も初ひ松に諸に色後によりやの内結ゆて謀
らるく意報の場奇て妙に咎なく内結に諸られく禁裏に忍び
入くわらる所武士が変化とくんとて諸くと反對なり
弄柱が咎なくとい海に山る所も武士が咎なくに脇られ一独報に
咎なくが仏業ぶに伝交ゆも有でく笑次が照應に鴛鴦江元
可函変の件いのおんが液せ一二百金より起りくに市丈婦
もお及庖丁ゆて二百金の為にとられより又元可も盲人ゆて

著作堂蔵

出双庖丁ゆえ母の為に殺さるゝ所に因果應報の理よくも
作りとるさまとて妙潮に慾のあまり子と殺れとゝども子金ハ
ひゞ松に取られひゞ松ハ元謀の金とるゝ又鳥のあまり奪
つゝ此金再び琴柱のもとに成る所奇こと妙に
安に又一ツ妙所あるハ琴二百金〻究竟ワケ市夫婦が娘と
老人の妾に成て三義の利とるゝ金ハ逐に賊の為に
ほられて三ヶ月と殺ほるる九ヶ月ハ又殺伐とゝく奪
ひ金ハとられども川の中へ落入て失ひぬ
允可ハ人の妾と密通して弐百金と売せられるゞ是も
盗んとゝふ心あり故天罰忽ちくゝ母のあやまち

母もゆ知て慾のあまりこゝと殺せ一金ハ虫ひゞ松が
あまり奪られひゞ松も亦人の金と横死せ一ハ弐百ほとられ
琴柱ハ元初叔父と助んとてありとゝて得られども水中ゆ
弐百金とるゝ叔父と助け又ゝ人のあまり仇と拒れく
女官とるゝとるゝ又ゝとられども鳥より金と交り此二百
金ハ善人のあまり幸とゝるゝ悪人のあまり出ると招く絶
二包の金ゆえ善悪應報の異なるゝ奇こと妙に泊ほ述ゝ
しゞ〻〻琴嗣この編著述と侯ゝけり
あゝ元なる金ハ瓶の梅のもゝ
琴幾ゝ元のつきゝとゝ

同小ヤウハ元可い赤飯を助ケて人の妾と犯せ一ウ小人の誘ひ
金とき盗んとせ一愚心小ヤを母小害され妙淫も亦人を姦通て
尼小せられとさりぜ一て人の妻通と導ク毒悪の去きるとまづ
殺ケも是亦的當の仇ゆるゞ女りん次いよりて人ものるゞ飛
亦悪とふ程のるもはず人ゆるウ小又武子ウ女りん次ゞ宅
と立迫ケ仇ゆるゞも是ゆゞと元く奔りくり勿論女りん次
七以ての武ゆ家夫婦武ケ子兄弟ゆい多く労とうけて元じる
とせぞりぞうるハ武子ゆ武ケ子ゆ元ゆ元ゆ労と実ゆる方ゆ多ゆ
べれるまゞ亦武子ゆ元ゆ考ゆいハ人ゆハ不忠の金ゆて人ゆ
旅かるウ小人ゆ害ゆれゞ返ゆ人ゆ度ゆ宮ゆ自て拒ケ一

金ゆれゞ日後出身の時小南ゆ武人ゆと返ゆぞんゞ武子ゆ義ハ
立ゞゆるゞ一弱ゆ小女りん次ゞ一子の元可ハあゆ自ゆ死一て家ゆ
絶果ゆんゞ武子ゆ武ケ子ゆ後いづく小向ゆ小報ゆ子ゆ先生ゆ
果ゆくゆれゆ又ゆるウゆ執向有へゆれゞゆ只打ゆる所ゆ
い先ゆりん次ゞ不幸ゆとゆゞれゆ小ゆるゆゆゆ小ゆゆん
古ゆ恩評ハ幸便ゆつゆ早ゆゆ小ゆゆゆゆゆゆ
後ゆ一男ゆ海小ゆゆゆ小ゆ一笑ゆ上ゆ茶待ゆる事
小ゆ

正月廿二日

著作堂拙者ゆの芳評を閲て嘆唱のあゆり叩小編

左よ數行を書くくりく芳情小答する言たのか〜
金瓶梅第六集前後四冊繻忱へ到来ぬる小今茲正
月世目えうのるへと安元〜よ僅よ三冊の程小芳評弐
編と綴りく郵附〜て凡せあひぬる翁の敏捷桂子と
伯仲〜てるい徐るとも劣るぐ〜ぞ且評定皆錦綉珠
玉の明辨わく朱心の外あらぞ紙中ゆ十帛が好虐
嬈乱るるづく人の妻人の熟妓を奪ふく已が妾ゆ〜
ける悪報ゆて先ゆくみるやふ折ゆえるを後小い秀柱よ搦
捕らる亦是妖女ゆ婦のるよ辱わとゆるりとらるい評
云妙中の又妙ゆて作者の肚裏とよく透徹せられう

又福六が損〜るる金も一万あ姑子〜が罪と償んゆ小費〜る
金も一万両善悪應報影とかちのぞくるとよくもんらを
るるるあまらい弱く智音ゆるぐ〜ぐんゆ評〜ちの故の
芳評皆あぞ〜只編左小允可が横死のるい就く武二
が鯁毛潔白の行狀小小疵あん欲とく疑訝の言ゆて
後〜まく凡あらねばちの疑ひい　ぬ〜ちのるけ下小ちるぬが如〜
武二郎武松が故東人五紋次い落毛吝嗇〜武二郎武松の父無
のゆせぞ出〜る餅店の餘財ありるぞ〜武ちゆう故〜へ還る時
路費とまく與へむ〜と後又武松い給金と定わぞ七かく使ふう
さん〜武松が沖見の奸夫ヲ人殺るい仇せられく已とるを宛

家と數年果して亡命たぬる時携へる東人五紋次が餅の價
錢とりて路費にもとりとも所云大巧に不省細謹さひゆて敢
これと罪とはべらじ志ゐれども武子武松潔白廉直の勇士
年来その肚裏にかの錢財のるると思ふ忘る日なるべーさんば
とそ沖見の妙潮に五紋次が離縁の妻にて且武子が兄の寃家
なれば明の金とこれに返せ〳〵さとりの又五紋次がひとり子餡助
の允可もその心術穢れる育人にて初にお蓮と奸通一後にい
お蓮がなを渡らる金三百金と掠わとまくかりーく妙潮り
後さぞその故にその母妙潮の不知の毒にに遇ふく横死とり
すーく允可が横死せぐ後こそ存命へく存りともの不良の

小東人に彼金と返して武子豈快と思ひんやこそ是にふも
なるとふに武子が成せ所後に至りく作者もくの腹稿あり
そを後に至りさんば分解ぐーー但九郎と妙潮が賊悪の
致せ所共に生危とりとそるる前後と照らる妙評い実に
是千金の〳〵翁にあーざらせば疑訝の評もありぐーーん
予老眼とー毎に衰と覚るとき細字の稿本い綴る甚
苦しければ金瓶梅い結局大団圓まで綴り果さん欲中途
やて筆と輟ん欲我ぐ必定ーぐーさんばの拙評答々
翁の疑ひに答るのみるーぐ是とんる有官の惑と解
く一端とるーん欲

己亥二月念四

増補 稗史外題鑑批評

黙老述

此書序中ゆ其巻毎の意味を畧記ことあるこゝもりゝ本
おゝ行更江戸板の書と雖とも畧注なきもの多くして序文
の趣と相違せる則てゝ此序の文面ゝ齟齬せりとゝ云べ
第一軍記の部ゆゝ作者画工の姓名なし又都べて姓名況
省くことゝ思べ繪本應仁記の所出そゝ輯者画工の姓名共
小出し里見軍記ゆゝ輯者名而已出せる凡圖會物繪
と主として書る物と画工の姓名と出さゞるゝ疎漏
といべし

稗史撰集 著作堂蔵

第二復讐實録の部めも輯者画工の姓名なれと右小
同じく殊小此部小実録と名付しハ如何小ぞや今世小流布する
写本物仙臺萩殺生轉輪などハ偽書と種として
頗る雑劇の趣を摸せり物ゆて先ハ傳奇院本の類と
いふべき実録と題する心得ぞ
第三稗史の部是亦輯者の名あつく画工の名あるも有
きもあり且白糸草紙とそのく雪小刃り柳の糸よ
り小櫻姫小刃り蛇物語より花菖蒲代記比丕傳などを
以下花之暦小刃りてい小注い叔置輯者画工の姓名更小
なし泉近衛物語と福内鬼外なると福地鬼外とを

沉香亭の趣向など賞参せい如何小ぞや本朝水滸傳を
日本水滸伝と記し室の八島と吾妻の作者の及ばざる妙
作と何と指くいふもん越路の章ゆえ志ろ物のかち深ちて亦
同じく輯者画の名なし又玉山ハ白狐傳を吾妻の作者の由緒も
なしげる妙作といふべし青砥石文とび琴魚ハ作とせびて著作
翁の作と書い笑ふべし四天王剿盗異録と只四天王とぞり出せい
陳漏濡燕栖傘雨談い墨川亭ハ著作翁の聲色を
つくし書ゆて翁の序ハ沉ども扶合ハなし且この書のありした
題目小反して不破と主として書とるゆえ不破のるい変く
名古屋のるい略せり并小山盗退治のるるども省文多く

前編は細にして後編は疎なり全部瑕瑾の書といふべきも然るを京傳の稲妻表紙ありとあるは誉るとなりといふべし俊寛嶋物語を著作翁の著述ゆゑ八犬士傳を除くの外著書最第一とおもふ如何なる仮ぞや翁の著書長短同じくねどもいづれにおもしろきあれども唯その好みといふ点を愛憎の自心に在り公論といふべきにあらず嶋物語をのぞきといふ事が取るべき所

第四長編大巻の部 新田功臣録と出せるは玉の落穂のなんぞ此書はと唐山の小説金石縁金傳によりて作りとあれども筋のとおらぬ所あり係史に考へて変ぜ

しもなんぞ春水が拾遺に蛇足とふべし又春水が十杉傳九牛士傳は著作翁の八犬士傳の類聚に效ふ所ありも親るに恐ね書の譬に出火閣を名玉に較せが如し 扨亦八犬士傳の略注の志げきところなるべし此外題鑑の趣意は此書は何々のる云々と奇談あるべく略注するぞよろしく八犬士傳に注する所は一体の書の巧拙と論ずる如くなれども素より書の題目をうを知らざるが肝要なれば何とのるを記さとふとぞ考るべし

悔しくは巧拙善悪は親の人に預け云ふぞよろしく推て考るべし八犬士傳の蔭にて已が名をうんとなる云ふとぞ思る譬ば肩輿にのりて山阪をのぼり青蠅の驥尾に附く千里に行かも

同じうんぬ

第五時代物の部是も輯者画工の名なる前に同じ
妖婦傳と玉藻譚とやうとなるも文ぐし妖婦ゆゑに妖
狐唐土より天竺にうつり又再び周に来りて褒姒となる作
る贅言に似く覚るに厭倦る心地にはぐも是非に此褒
姒の執向にうぶ初の妲妃のるを除くがうんえう文ぐも
けつく面白ふ通俗武王軍談にも妲妃に狐妖と褒姒に亀
の妖にて別のるを但俗謡殺生石に周の幽王の后褒姒
と現じとふ文句あるに合さんそのるをうんが何かても妖狐が
唐土へ二度出くに折角の作意が中たるみせを文とび玉藻譚

よりもーとはいひがたうんヲとなく覚れば此二書に相伯仲にと
いふべきなれ

第六奇談怪談は部是等の部に分く多くる物と統
に七八部にてぐりいふぞや勿論數百部にて記し尽さん
ざる故その中の佳作ばかりとるゝみ出とあるとても垣根艸子
さけるに如何ぞや英草紙繁物語に伯仲せし物にて中と
芳句冊二艸の類にうぶ且芳句冊と芳句冊と誤
雨月物語と兎月物語と謬るに沙汰のらぢりこ是に筆工の
誤に知らねども海ぐしも兎月物語と仮名と下さば宜し
うんに兎月とせいふぞや小説中弁といとも著述もいる

者ゞ湯桶讀の仮名と付しい抱腹のるゝ殊小一席話
越後雪譜田家茶話などい奇談怪談の作て物ごと
の形ひ小非ずそとゝ小混じて記ひ給ふ事を知るべしとゝ
第七高僧傳の類是亦輯者画工の名るに前小同ず
第八隨筆の部此撰も亦疎漏へ集義和書ハ大和
大学などゝ記して隨筆小非ず又近世畸人傳續畸人傳
等ハ人々の小傳とゝ物して隨筆小非ざゝ俳家
奇人譚狂歌奇人譚是小ハ廣益俗説辨ハ文體
裁の形りる物小て隨筆と大ゞ異るゝ隨筆の部
い精粗好ゝらくして一ツくゝ論ずべ此内の書小ゝ

のけゞめにるべるゝ

第九唐軍并諸記録の部ハ内小も猶ゝ画工の名るに
ヨメ〜且唐土名勝圖會并清俗記聞ハ地理志の部也
五畿内名所圖會琉球事略等の同部の物なれば此
所へハ入ゞゝ幸小江戸都名所圖會の名
ゝ号會多ければ別小その部の部と立ゝ地理志の部と
ゝ又通俗排悶録ハ奇談怪説の部へ入て陶
の字と間小傳ゝ清俗紀聞の紀の字と奇の字小謬り
しい筆工の誤りにゝ也ん又隨筆の部へ司馬江漢の
西遊旅譚などい加ゝ給ひのゝ

叔初に書漏せるが全体此書に繪入の稗史と言て
記したる物なれば義家義經の二將とんだる諸將の
一代記の繪本五冊續の物語りく有るべきなれども
しとなるべく又唐詩選繪本なども婦幼の人々唐
詩と解する為かもるあるべき色等も隨筆のれ
のちうつの紀添の紀へうもしたりのるべからず

增補外題鑑に疎圖杜撰見々に足らざる几籍なれば
士君子の齒に拭けるべきものにあらねと默翁るにはし
ばらくその大疵とあげつらひなひに彼撰者の為に鍼砭
のこるべき彼書と廣きるの疑ひと解くに足まり已も
曩に其の一本と得るまばらくわたるヨヌるとにるを
益の筆ときみにとはあらば默止るに今この芳詩を
示されしとのあはうちに數行と添るのに吾著
編のうへとのこの翁の許と併しるべし
增補外題鑑に碗久松山物語五冊馬琴作と有
いとうるべし手にうる書名の冊子と綴りしとる色に

繪作堂藏

文化中書肆の需に應じて括頭巾縮緬紙衣と
いふ三本三冊つゝく角板今に後に至てその外記
ぶの撰者ゐる者あるが恣にその書名を改め且綉
像と更めて再刷するものあり吾これを咎めて八犬傳
の附言にもつけ加へり他の後の書名をも載
る吾在世の今日もそれ人と人とを爲ねと人に利の
爲ふるひがるとそれば吾るゝん後いかゝ忌憚る
るべし〻伍子胥るせば必眼と呉の東門に掛
んとやいざゝん呵〻〻
その所い然翁の芳許にあるべく四天王剃盗異録と

四天王とのゝ〻〻古人櫟亭琴魚の作る青砥碑と
馬琴作と伴り栖傘雨談と馬琴校合ばつゝ
ゝるゝるゝるゝゝとゝ塙ゝたひがるれば角板は
書肆小その非と示してゝ〻その板小入木して云云と也
いべしとひゝゝど既小發販の後るれば生ゝゝてゝゝ
果さば且板元の書肆云増補外題濫いゝゝ上方の
仲間へつゝさば當春京浪花の板のゝゝの漏ゝと
増刻して上方のゞせとせゝ〻ひいべその折るどゝゝ
然入木せ仕ゝるどゝひけり但そのゝれゝるの上
方板のゝるんやその板元い貸本の問屋ともるゝゝ

思ひざるをもてよりてかのふ同日の論ありなど群書一覧なども素より所据にて新撰なれ撰出あらはなど今に至て續書の稗益少なからざる増補外題鑑のごとき俗中の大俗也 几籍中の大几籍なり惜哉なく撰ばれ人の重宝なるべし盆石畑山の記い文化中吾著編の中本物のごと本なれて前後四冊外紀盛小中ないなぞ出さざるこの畑山の記とのこと我なるいなる故ぞやなるなるべし

園の雪も文化中吾著編のごと本なる小翁の批評小いられしぞく是のこと作者の名号とりなしなるいなのあぞや

隨筆にこの外題鑑などふの世間ばれの縱已るとなれば出ともも原書のこと小必實名とるべし去ると吾隨筆とも

て皆馬琴作とるべしとり只玄同放言とのこと曲亭大人撰と録しるいこの書今文溪堂の流板なるべしなんさばれの曲亭も亦非之他いこの我とるべるれ譬ば前輩南畝のやれも実録小南畝と称し狂詩小寝惚先生と称し狂文狂歌小四方山人又四方赤良と称し晩年小杏花園又蜀山と号しなれども彼翁と知るの小寝惚も四方ともい者なし況隨筆小蔵号とるべしよりほんや慎むべし

戯墨の策子も各年序あり吾半紙にこのよしと
つゞりしは享和中の月氷奇縁が初筆にて石言遂書
稚枝鳩は又その次へ他作も皆必前後あるべし拙ふ
三四十年前の舊作と下ふ〳〵四五年来の新作
と上ふ記て新舊錯乱せざるは稀なるべし看官の為ふ
不便宜なるべきゆゑ況や又建部綾足六樹園などと
大人と稱してその餘は撰者の私意とのて褒貶とり
且六樹園は狂哥とするつかるのゆゑにその作は三部ふ
とざるふこの人の作飛彈番匠物語と題ふ出せるを
いふぞ我彈丸ふ為ふ笠翁傳奇十種曲の一種

と飜案して天朝の故るふつゞりなるのゆゑにて六樹園が
後閑より告て出せし頗向ふあらぬと春水はゆゑで尽の
人とする信のふりて書ふ出せしるべしその撰ゆゑざる
なく他ふ自意とさしみく褒貶とするゆゑにたゞ
既翁の許ふ乞えるべくうる書は毎編作者と画工と
名号と具ふ記すこと是は行ことつゞしりのと更注せば
看官の重宝なるべし拙を画工の名とのじ記した
ふ至りては作者とも記るゆゑ況何とつゞりの紀隻字
も略注るべきゆゑ看官のためふ不便宜勿論その
略注るも事のよけとばいふ動せまべ評言と宗と

しるいふぞやこの義も默翁の難ぞなひしどく吾作は
讀本の内八犬傳を除くの外俊寛嶋物語を才一の
佳作と評せいふぞや縱春水ハ為ふとも江湖上
億兆の諸有官他が極メ小就く雷同せんや爰ハ他
人犬傳ハ長編小くらすぐ大図多小ねどもよく
本と好むの誰うんぎるべに化ハ略注ハとも先為
い要るとと毎輯ごとく畧注するぐふをこぞるふ
且褒貶の詞とぐ〳〵己が才を見さんとしらく矣
ぐーとの撰出ハ都〳〵世界と壁とんく人と人ども
思ふ烏許人なるぐふや軍書とよみくくく生活ふ

ちねるも下ふるれども大音と吐きて愚俗と驚ふもと自と
にさんぐ軍書講の拭ハ燈小人情物滑稽作者の
開祖才一家為水春水とちく〳〵りそと忘ある聽衆も
只合咲のこと文溪堂の話〳〵是ぞその心術知るべきん
ども春水が誨淫猥執袋の中本ふく賣ふくとりて外
ハ盜の板元殊小親愛のあるりとりく〳〵小向く
中本物い春水當今第一之種彦といども及ハ化
凡春水が中本と綴るふ毎編聊も構思せ心筆ふ
任せれども看官愛玩拱璧の如く春水もみつく一
奇小ふ二アといりちるふ客歳北斗弟画ハ改役

物の本
ハ寛政中
官禁あり
今ハ禁
ゆるし

の名主等誨淫猥褻の中本と禁止して絶板する
もとりと云春水ゞ作る春告鳥といふ中本ハ口画を
色揚りして俗ふんく亢と音とする三巻と一
編として第五編まで出たり第六編より書名と文章
まゞ花の梅といふ春告鳥も絶板の内出て憚りある
小りて人の好憎一致ゞ猥褻と歎ぶ者ハ
勿論べ〳〵ゝ外題鑑も又愛る其あんれいゞ
知ゞ成事不説既往不咎又言人之不善則
如後患何と孔孟いれど外題鑑の如き実ハ垢
ゞ亢籍なれば黙差翁の芳評寔に以あり

その非といゞ綾旦ゞ本朝水滸伝を録しるゞ春海
の筑志船と載せゞ且本朝の辻伝い第二編写本
出て伝ふ縱印本なゞも後編あるゞそのまゝと注
せゞ亢りのゞ小本朝の三字と謬く日本水滸傳と
なるゝと思へゞ春水いゞその書とんゞるゞ
只其のゞゞゞ不見不知して書名と人ゞゞく録し
るもある故作者画工の名号もゞ漏しゞゞ
小五郎舊作ゞ園の雪さへ作者の名とゞるゞ
いゞ形る故少ゞ其杜撰疎漏ゞゞ吾言と待ゞて必知
るのハ知ゞ

著作堂蔵

又あるが稗史小説い都べて回數とりそかぞふべし是
唐山稗史の例へハ犬傳の如きも唐山稗史小倣へる
者わづく且百五六十回小至れる長編　天朝の物の
本小い未曾有るなれば必回數をりて注ハべきるふ
外題鑑小い輯數と卷數とのミ挙べく回數とハらべ
ども等のるも春水が唐山の稗史小疎に故るると知るも
他作の上ハこれ〻悔を吾舊作と謬られ〻ハ犬伝
第九輯下帙の下の末編小ちるつけくらの非と訂
正せまく思ひど板元の書肆文溪堂の敢ぎるるるべ
いらふまでもなくいまぐ決せばさの芳評の附言のごとき

多く人小見ハべに為るべ口ハ黙翁の笑ひと取らんとそる
れいらひのまく小ちるくとりさいれ士君子の歯小拭くべに書
小ものらぬと翁の芳評りて鍼砭ーぬひ〻ハ他が幸とふ
べし翁の芳評るりせば吾も亦ちる小言を盡さんや
共小已るとるざれいべ
又意ふ小ちの間と書名と外題とハるハ今俗の鄙言
へ増補外題鑑い文溪堂の舊流板小外題鑑とふ
両面揃りの一枚物あると増補せーよるれハ今ちく書
名と改わるくとも春水りその非と知ふ一名近世物
之本書名便覧るどいべき者へ俗骨のるせ作ち

いふして雅俗の用捨あるを知るべし他が自序に書と
ヨミ買賣をいふと捌くなどいふ鄙俗の言を用ひるも
その浅薄を知るに足んぬ又おなじく春水外題鑑の増補
と文溪堂の需に應じたれども彼身も同穴の狸貉なる
戯作者なれば憚るなく文溪堂の自撰なりて己が
補正と稱し旦教訓老人鷦鷯貞高と実名を書しも
春水にとき〻猥褻の書と著しみづ〻〻教訓亭
と號せるに耳を塞ぎ鈴を竊む類なり寛政中
京傳が洒落本に板元畊書堂がちらして教訓
讀本と名づけて反く　官府の御咎に遇へると同日の

談に抱腹に堪ぬるのみ又あるに外題鑑に漏れる吾著編尚
あり記聞の書に俳諧歳時記二巻画本に繪本竹
馬鞚北馬画三巻繪本大江山物語北尾重政画三巻戯墨に
ハ戯子名所圖會豊國画三巻化競丑三鐘重政画一巻
半紙本の薄物なる金毘羅利生記一巻同戯墨雪
也雲道行長喜画一巻色刷なる分歌鑑に孫世代拙と西行
折著述目録によりてとく訂ちば漏るる者多あるべし又繪
本武王軍談前後十巻吾が譯文なく北尾重政の画なり
是も漏れり又吾隨筆に京雜の記と雜文記とをもて
小子ぜのさと偏訓と附せり色々に殊に甚しく謬りあ

外題ばかり
一夕話又
一席話と録
しそう杜撰
枚挙に遑
あらず

い知る人笑ふべしこの餘著作堂一夕話又荘蝶翁再
遊外記などい僅に文溪堂の需に應じて苟且にその書名
を出すこと多しと況中本物の作なども文溪堂の需ありと
いへども何と綴ん紙ひらぎ反故ばかりにて其書名はいはゞ定
めざりける書名の処を黒木にて既に稿本のいで来ること
注しるし板元の好こゝろ我うらは是を見れば とうしも
ありうちうづうくも覚えず額に汗せざるをえざるもの
かも利のみのみ揣ける坊賈細人の用心は吾に異なるものぞ
ありける他作の上にて外題鑑にあゆれるとらぐらく十ひらけ
楮筆と費はとも果しぐるべしそれらい吾上にあづらふなるべ

い訂さぞ黙評あるべき其大槩は知るべし
附くいふ近日吾編ける合巻物の本い新編金瓶梅と除く
の外毎春出る新板なけれども地本問屋の動もせば吾が著作
の草冊子と再板と新板とをもて出ひるのありとゆゑに中
小説反故紙などの再板ける見藥霞引札又は用節用似
字盡などい再板とをるべしんば論すべこの他森屋
次兵衛が再板ける大師河原拵子草紙寛政中蔦屋板又書肆何ぐが
再板ける風俗金魚伝文政年間歳反板などい再板と言小告げぞ剰紛
しく新板とをるとうと云金魚伝い今茲己亥の春の彩板と偽
りて去年の冬より賣るとはこの外小言夢知らぬ再板多あ

著作堂蔵

はべりしかれも瞞ゆく多く賣ることのごこの後もいよいよ手が舊作と再板
と新板と偽るの春毎に出るもはなん実に嘆むべく憎むべき畢竟爲
永春水が恣に手が舊作のうち本と式に書名を改め繡像と新刻して
人の爲に再板再刷と揣りて遂に此毒を流せり是より柴屋文七
も高尾船字文の繡像と更めて再板しけり但し是に再板とる
しるべ作者に告ずれども新板と偽りて世の有官と欺くの甚し
に似ず彼も是も皆小利の爲に春水がひがるふ做ふの外なし是吾虚
名の咎欤是吾虚名は咎也噫

天保十己亥年春二月十七日

著作堂老禿稿